## 会員通信·News and comments

#### オーストラリアの博物館

オーストラリア博物館の Visiting Fellowships によって、1987 年 4 月 21 日から 6 月 24 日までオーストラリアのハコファ上科魚類を研究することができた。この間、オーストラリアの主な博物館の魚類標本を調べ、同国の魚類学者の現状を知ることができた。オーストラリアには日本とほぼ同数 (約3500 種) の魚類が分布し、グレートパリアリーマには南日本との共通種が非常に多い。このためオーストラリアの魚類学者は日本に注目しているが、日本ではアメリカやヨーロッパに比べてオーストラリアのことはあまり知られていない。この機会にオーストラリアの情報を会員の皆さんにお伝えしたいと思う。

成田空港から直行便に乗るとシドニーに9時間で到着 する、オーストラリア博物館は空港から車で30分の所 にあり、ハイドパークの斜め向かいに位置している。 魚 類部門はウィリアムストリート側にあり、キュレーター It Dr. John R. Paxton & Dr. Douglass F. Hoese の2人である。この他に研究員として稚魚の研究で有名 な Dr. Jeffrey M. Leis がいる。 魚類部門には常勤の 助手が2人、非常勤の助手が1人、標本発送の係りが1 人,他の部門と共有ではあるがタイピストが3人いて, 非常に整った組織である。Paxton はクジラウオ科魚類 を始めとする深海性魚類の研究で知られており、Hoese はハゼ亜目魚類の研究の第一人者であることは日本でも 周知のことと言ってよいであるう. Leis は熱帯域の稚魚 の研究の牽引者の役割を果たしている。彼は 1983 年に インド・太平洋のサンゴ礁の稚魚に関する本を出版し た、現在その改訂版の原稿を執筆中で今年中に脱稿の予 定である。今度の本には前回含まれていなかった多くの 科が収録される、また、著者は 13 人になる、ただし、 大部分の科は彼と助手の Tom Trnski が執筆している. Leis はこの本の執管の他にフエダイ科魚類の稚魚の生 態を研究中である。 オーストラリア博物館には、これら の職員の他にニューイングランド大学の博士課程の院生 でメギス科魚類の系統分類を研究中の Anthony Gill ト カナダ政府の Post Doctoral Fellowships によってカレ イ目魚類の系統を研究している Dr. François Chapleau がいる (10 月上旬帰国). このように多くの研究者がい るので魚類部門は非常に活気にあふれており、オースト ラリア 魚類学の中心といえる.

オーストラリア博物館の魚類標本は液浸標本保管用のビルの最上階に収納されている。標本の保管状態はよ

く、コンピューターによって登録・整理が行われている。 Paxton と Hoese の指揮のもと Mark McGrouther と Sally Reader、Margret Atkinson によって標本整理は着実に進められている。標本は模式標本も含めて貸し出すとのことである。オーストラリアの研究者が使用した標本は同博物館もしくは他の博物館に登録されるよう推奨されているし、実際にそのようになっている。日本では標本が研究者の手元に研究終了後も置かれていて、他の人達が利用できない場合がある。標本は公的な標本管理体制の整った博物館もしくは研究機関に保管される必要がある。博物館のキュレーターとして会員の皆さんのご協力をお願いするとともに、博物館側の標本管理体制を充実しなければならないと考えている。

オーストラリアの他の博物館はオーストラリア博物館 と比較すると標本数が少ないが管理体制はきちんとして いる。 タスマニアのホバートには CSIRO (Commonwealth Scientific and Industrial Research Organization) の研究所があり、魚類標本は標本室に保管されて いて標本カードも整備されていた。日本の多くの水産研 究所ではこのような体制はとられていない。 考え方の違 いがあるのであろうが、オーストラリアでは資原研究に も標本は欠かせないという認識がある。 CSIRO の廊下 のポスターは、1種だと思われていた種が非常によく似 た2種であったことがわかった場合を例にとって標本の 大切さを示していた。標本がなければ正確な論談はなり たたないというわけである。タスマニアにはホバートに Tasmanian Museum があり、ラーンセストンに Queen Victoria Museum and Art Gallery がある。両方とも 古い博物館であるが魚類専門のキュレーターはいない。 魚類標本の数も少ない. タスマニア周辺の魚類の標本や 情報が必要な場合には CSIRO の Peter R. Last に問 い合わせるとよい、私が訪問したときには彼はタウンズ ビルで開かれた会合に出かけていたので、Justine O'Regan 女史が標本の出し入れなどを手伝ってくれ た、CSIRO は数年前にクロスラから本部をホバートに 移し研究施設も新築したとのことであった。

メルボルンの Museum of Victoria のキュレーターは Dr. Martin F. Gomon である. 彼はベラ亜目魚類 の研究で知られているが、現在はミシマオコゼ科やヒウチダイ科も研究している. 彼が8年前にメルボルンに職を得たときには魚類標本の保管状態は良くなかったそうである. 魚類部門のキュレーターは1人で、昨年までは常勤の助手がいなかったので標本整理に多くの時間を割

かねばならず、研究は思うように進まなかったとこぼし ていた. この点は当方も同様の悩みを抱えているので, いるいろと標本管理について話し合った、彼は South Australian Museum の Mr. John Glover と水中写真 家の Mr. Rudie H. Kuiter と共に South Australia's Sea Fishes という本を執筆中である。本書の著者は約 25 名になるそうである、現在 70% まで原稿がそろった ところだが、まだ出版の目途はたっていないと言ってい た、標本室はそれほど大きくはないが、よく整理されて いた、ハコフグ類の標本を調べていたら Bleeker Collection というラベルの付いた標本があるのに気づいた。 彼の話では Bleeker の標本が競売にかけられた際に標 本が分散し、その一部をメルボルンの博物館が購入した とのことである。その当時、ヴィクトリアは金持ちの州 だったので標本を購入できたと言っていた。この Bleeker Collection の詳細は博物館の出版物に 収録されて いる。Gomon は仕事が終わると毎晩いろいろなレスト ランを紹介してくれた。彼はワインの愛飲家で自宅にワ イン貯蔵庫をつくっているほどである。標本室の中にも 秘密の貯蔵庫があるらしく、夕方レストランに出かける ときには研究室に 2-3 本のワインが用意されていた.

アデレードの South Australian Museum は市内の 中心部にある。もっとも、アデレーFはそれほど大きな 町ではないので市内のどこに宿泊しても中心部へ出るの に時間はかからない、私が博物館を訪れたときにはキュ レーターの Mr. John Glover は外国へ出張していた。 しかし、彼がアデレード大学の Patricia Kailola 女史 と鳥類担当のキュレーターに私の訪問の目的を伝えてく れていたので順調に仕事を進めることができた. 博物館 の自然科学部門は数年前に改築されたので建物の内部も 外側も非常にきれいだった。改築前はひどい状態だった と Kailola 女史は話していた。標本の整理はよく行わ れていて、移動棚に収納されていた、標本の種類はシド ニーと比較すると少ないようである. フグ目魚類に関し ては標本のほとんどが南オーストラリア海域で採集され たものだった. 大形の標本はステンレス製の保存槽に入 れられていた. Kailola 女史は Munro の The Fishes of New Guinea の出版以後にニューギニアから報告さ れた魚類を収録した原稿を執筆し、その一部は近い内に 出版されるそうである。

オーストラリアの南西端にあるパースには Western Australian Museum がある。博物館はパース中央駅から歩いて5分の所にある。魚類部門のキュレーターはスズメダイ科魚類を始めとするサンゴ礁魚類やレインボーフィッシュの論文で有名な Dr. Gerald R. Allen であ

る. 彼の他にアソシエイトキュレーターの Mr. Barry Hutchins がいてカワハギ科魚類や西オーストラリアの 無類を精力的に研究している。<br />
今回訪問した博物館の中 で研究者が魚類部門に2人以上いるのはパースとシドニ ーだけである. それだけに魚類標本は豊富であり、特に サンゴ礁魚類の標本は充実している. 標本室はそれほど 大きくないが床から天井まであらゆる空間を利用して標 本が収納されている. 標本整理は Nick Haigh が2人 の指導下で行っており、コンピューターに標本のデータ は収録されている。彼は2年前に常勤の助手となったそ うである。それまでは2人のキュレーターが標本整理を 行っていたので研究時間があまり取れず大変だったと Hutchins は話していた。しかし、キュレーターとして は標本の管理がまず第一の仕事だという姿勢は、彼に限 らずオーストラリアのすべてのキュレーターに共通して いた。この点は私も全く同感である。

Allen は現在スズメダイ科魚類の分類に関する大きな 本を準備中で、今年中に脱稿するそうである. この本に は全世界のスズメダイ科魚類が収録されるので出版され れば非常に役に立つことは間違いない、彼は博物館から 自宅まで片道 20 km の道を毎日自転車で通っている. 自転車のロードレースにも毎回出場し、昨年は8連勝し たと言っていた、私は土曜日にパースに着いたので、翌 日レースに出かける彼の勇姿を見ることができた。彼の ユニフォームや自転車などはパース市内の自転車屋がス ポンサーになって提供しているという話には驚いた。し たがって彼がレースに勝てば、その店の宣伝になるとい うわけである。<br />
日曜日の夕方には「勝ったぜ」と笑いな がら彼は帰宅した、80 km を 2 時間で走ったそうであ る. 趣味もここまでくると立派の一語につきる. もっと も、オーストラリアの魚類学の同僚達は彼のことを自転 車気違いと呼んでいた、そんなことは百も承知で彼は毎 日自転車を走らせている。「魚類学だけの 人生なんてつ まらないよ」と言いながら、

タスマニアからバースまで2週間の国内旅行を終えた後、シドニーにもどり残りの3週間を過ごした。この間、Australian Society for Fish Biology のシドニー支部の集まりで講演する機会があった。この学会は会員数480名で1年に1回 News Letter を出している。会費は1年10A\$である。1年に1回学会発表のため会合を開いている。開催地は順番にオーストラリア各地の都市をまわり、昨年はダーウィンで開かれた。シドニーの支部会は博物館や大学を利用して毎月開かれている。学会全体としては水産関係の会員が多く、日本の水産学会に似ている。

オーストラリアからの帰路リザードアイランドにある オーストラリア博物館の研究所に寄ってハコフグ類を採 集した、この研究所はクイーンズランドの北東にあるケ アンズという小さな町から飛行機で1時間の距離に位置 している。グレートバリアリーフの中にあるので採集す るときには国立公園事務所から許可をもらわなくてはな らないが、理由がはっきりしていれば問題にはならな い、研究所は 1974 年に創立されたが始めはテント生活 をしながら研究をしたとのことであった。 所長は Dr. Barbara Kojis と彼女のご主人の2人である。彼女が訪 問者の受け入れなど研究所の運営の中心となっているよ うである. 彼女は非常に活発な研究者でサンゴの生態の 研究をしている。最近は研究所の運営が忙しくて海に潜 れないのが残念だと言っていた。日本の研究者にもっと 研究所を利用してほしいとのことであるから、サンゴ礁 魚類の分類・行動・生態などを研究している会員には一 度訪問されることを勧めたい、ボート,潜水用の器具, 飼育施設もあり大変使いやすい研究所である。 宿泊施設 も整っているから長期滞在も可能である。ラグーンは常 に静かでサンゴ礁は美しくて豊かである。仕事を忘れて のんびり過ごすのにも悪くない所である.

今回のオーストラリア訪問を通じて強く感じたことが ある。それは分類学は決して個人的な学問ではなく組織 的な協力がなければ発展しないということである。とも すれば分類学は顕微鏡と標本, そして文献さえあれば誰 でもできる学問領域だと考えられている。確かに分類学 にはそのような側面がないとはいえない。しかし、現在 の魚類分類学はそのような考え方では決して成就しない 分野となっている. ある分類群の研究をするには世界中 の標本を調べなければならない、「日本産○○の分類」 という時代ではない。 なぜならば多くの魚類は日本のみ に分布しているのではなく、他の水域にも生息している のだから世界を相手にしなければ分類群の正確な姿もと らえられないのである。では、世界的なレベル、という より今日の常識的な水準、の仕事をするには個人の努力 で十分だろうか、答えは絶対に否である。標本を管理 し、多くの人達が利用できる施設が必要である。これが 博物館である。 オーストラリアや西欧諸国ではこのこと は古くから常識となっていた。 大学の研究者が採集した 標本は研究が終了すれば博物館に登録される。ましてや 新種を記載する場合には模式標本はその国のしかるべき 博物館に保管される、したがって、後の時代の人達が、 先人の記載した種の模式標本や他の標本を調べる必要に 迫られたときに彼らのするべきことは単純明快である. 博物館に行く、あるいは博物館から標本なり標本に関す

る情報を送ってもらえばよいのである。

日本ではどうであろうか。日本には戦前標本を保管し、研究者が自由に利用できる博物館がなかった。このため標本は個々の研究者の大きな努力によって保管されてきた。しかし、個人で管理していると研究者間の人間関係などに左右されて様々な問題を生じてくることが多い。戦後になっても戦前のこの状態には基本的な変化がなかった。

このような状況が分類学にたずさわる者に非合理的な 方法を強制することになる。 つまり、組織的にではな く、個人の努力のみに頼って標本を入手しなければなら ないのである。これまでの殆どの研究者は標本の採集か ら始めたのではないだろうか、あるいは標本を持ってい ると思われる研究者 (研究機関ではない) を訪ねたので はないだろうか、少なくとも私の世代まではそうであっ た。標本を自分で採集するのも悪いことではない。生き た魚を見るのは実に多くの事を教えてくれる から であ る。しかし、いつでも、どこでもこの方法のみというの では分類群全体を把握するのに非常に長い時間がかかっ てしまう、これでは分類学は個人的な学問の域を出ない し、西欧の研究者に遅れをとってしまう。 それにも拘ら ず日本人が優れた業績を発表してきたのは個々の研究者 の高い資質と非常に大きな努力によるところが大きい. だか、このようなやりかたは改めなければならない。日 本の魚類分類学も組織的に行われるならば、更に大きな 発展が即待できるからである。そのためには博物館ある いは博物館に相当する機関を充実しなければならない。 そして標本を組織的に管理し、誰でも必要に応じて調べ られるようにしなければならない。 国立科学博物館はこ の体制を着実に整えているし,東京大学総合研究資料館, 京都大学農学部附属水産実験所の水産生物標本館、そし て北海道大学水産学部の水産動物学講座も標本管理の体 制を整えている。 標本は現在研究している人にはもちろ ん大切であるが、それと同様に、あるいはそれ以上に後 の時代の人達にかけがえのない物である。日本も早く西 欧の標本管理・利用体制に匹敵する組織力を身につけな ければならない。そのためには多くの魚類研究者の協力 が必要である。科学博物館は会員の皆さんの便宜をはか るべく体制を整えている。研究を終えた標本は安心して 科学博物館に登録して頂きたいと思う。特に新種を記載 する場合には模式標本をぜひ登録して頂きたい. 西欧で 当たり前となっていることが日本でできないわけはない (松浦啓- Keiichi Matsuura) と思うのである.

# Malacocottus kincaidi Gilbert et Thompson a South Central Alaskan Species?

The systematics of the genus Malacocottus has been in a state of confusion for some time. Bean (1890) described a monotypic genus and a species M. zonurus from the Bering Sea, with the notation of a fourth preopercular spine present on the "cheek". Quast and Hall (1972) did not include M. zonurus in their list of Alaskan fishes. They implied that M. zonurus was a junior synonym of M. kincaidi Gilbert et Thompson, 1905 (type locality: Puget Sound, Washington) by citing literature which used the nominal M. zonurus as literature found under the species M. kincaidi. Hart (1973) illustrated the description of M. kincaidi with an illustration of a specimen that displays the fourth preopercular spine on the "cheek". This specimen is listed as being from Alaska (Hart, 1973). Watanabe (1960) wrongly attributed the authorship of M. kincaidi to Bean.

Smith et al. (1969) and Feder et al. (1973) reported *M. kincaidi* as being present in Port Valdez, Ak. Examination of their specimens and others in the Aquatics Collection, Univ. of Alaska Museum (UAM. 763, 764, 765, 766, 780, 1026, 1037, 1046, 1047, 1048, 1052, 1060, 1069, 1095, 1098, 1111, 1561, 1567, 1568, 1569, 1570, 1582, 1585, 1586, 1644, 1646, 1647, 1785,

1810, 1948, 1949, 1988) reveals that all specimens have the fourth preopercular spine on the "cheek" as in the description of *M. zonurus*. At this time, records of *M. kincaidi* outside the south east Alaska region should be considered as possible specimens of *M. zonurus*.

#### Literature cited

Bean, T. H. 1890. New fishes collected off the coast of Alaska and the adjacent region southward. Proc. U.S. Natn. Mus., 13: 37-45.

Feder, H.M., G. Mueller, M.H. Dick and D. Hawkins.
1973. Preliminary benthos survey. Pages 305–391 in D. W. Hood et al., eds. Environmental studies of Port Valdez. Inst. Mar. Sci. Spec. Pub. No. 1.

Gilbert, C. H. and J. C. Thompson. 1905. Notes on the fishes of Puget Sound. Proc. U.S. Natn. Mus., 28: 973-987.

Hart, J. L. 1973. Pacific fishes of Canada. Fish. Res. Bd. Can. Bull. 180, 740 pp.

Quast, J. C. and E. L. Hall. 1972. List of the fishes of Alaska and adjacent waters with a guide to some of their literature. NOAA Tech. Rep. NMFS. SSRF-658, 47 pp.

Smith, R. L., C. P. McRoy and S. Stoker. 1969. Biological studies. Baseline data survey for Valdez pipeline terminal. Sect. 5. I.M.S. U.A. Rep. No. r69-17: 167-235.

Watanabe, M. 1960. Fauna Japonica Cottidae. Biogeographical Society of Japan, Tokyo, 218 pp. (Kenneth D. Vogt)

### 会 記·Proceedings

#### 昭和 62 年度第 1 回役員会

昭和62年5月8日(金),於東京水產大学,出席者: 上野,阿部,新井,石山,沖山,黒沼,佐藤,富永,中村,藤田,丸山,望月.

議事: 1. 事務センターの担当者が6月から野嶋恒一氏に交代するのにともなう挨拶があった。2. 報告事項。年会関係収支決算報告があった。34 巻1号は5月31日出版予定で、16 論文掲載。手持ち論文数 74 編。3. 年会のまとめをおこない、改善点などについて検討した。その主な内容は以下の通りである。(イ)ポスターセッションの申し込みが少ないので、増やすように努力する。そのため PR のための説明時間を講演の途中に組み込むことを検討する。その他、(ロブログラムの申し込み形式を統一したものにするため、3 号の会告と一緒に申し込み用紙をとじ込むことにする。その他、また、来年度の

年会について検討し会場は東京水産大学とすることにした。4. 事務センターとの契約について検討し、原案どおり契約することが承認された。5. 日本学術会議の第14 期会員選挙のための学術団体の登録について検討した。申請は前回どおり第1順位に第6部水産学研究連絡委員会、第2順位に第4部動物科学研究連絡委員会とすることにした。6. 国際魚類研究会議事務処理委員会の構成について検討し、同委員会規定第4条,第5条に基づき以下の案を作成した。

岩井(委員長),上野(副会長),新井(編集),谷 内(会計),丸山(庶務),石山,岡村,尼岡、あ と1名は,会長,副会長で相談の上,決定する こととした。(後日,本間氏に決定。)

なお任期は、同委員会規定第6条により昭和 62 年度末 までである。7. 昭和 62 年度第 1 回評議員会において